

テーマ：澤田流太極療法の原点

目的

「太極療法」を出来上がった治療法として学ぶのではなく、それが生み出される過程を考察することで本質に触れ、臨床でより応用の効く実践的な治療法とする。

方法

「太極療法」という治療法が出来上がる以前、澤田健の柔術修行時代の資料を調べ、柔術家としての側面が、その後に出会う『十四経發揮』や『難経鉄鑑』の研究にどのような影響を与えたのかを考察する。

キーワード：新海流柔術、活法殺法、澤田流、太極療法、十四経發揮、
難経鉄鑑、丹田、一源二岐

参考書籍、参考論文

1. 鍼灸真髓 代田文誌 医道の日本社
2. 鍼灸治療基礎学 代田文誌 医道の日本社
3. 一元流鍼灸術の門 伴尚志 たにぐち書店
4. 日本型東洋医学の原点 伴尚志 <http://1gen.jp/1GEN/PDF00.HTM>
5. 古流柔術技法 平上 信行 愛隆堂
6. 増補大改訂版 武芸流派大辞典 綿谷雪 東京コピー出版部
7. 鍼灸澤田流 山田国弼 鍼灸沢田流継承会
8. 灸点治療法 市石喜代治 集文館
9. お灸の常識 中川清三 曲肱堂
10. 十四経發揮 滑伯仁
11. 難経鉄鑑 広岡蘇仙 伴尚志訳 たにぐち書店

氏名

木村鍼灸院 木村 辰典

はじめに

澤田流の「太極療法」とは鍼灸師であれば一度は耳にする言葉だと思います。

元々は太極、つまり人間丸ごとをみて、生命力が高まるような治療法を指していたのだと思うのですが、時代が過ぎるにつれ言葉だけが一人歩きして、その解釈や治療法も多様化しているのが現状です。

しかしながら、自身が考える治療法だけが真の「太極療法」で、他は間違っているなどというつもりは毛頭なく、むしろ今後も「太極療法」の影響を受ける人が増え、それぞれにとって「太極療法」を磨いていくことができることを、心から願っています。

1. 新海流柔術の達人

澤田健が柔術の修行をしていた話は有名ですが、具体的にどのような修行をして、どのような身体観を身につけていたのかを考察してみたいと思います。

澤田健は、祖父の代までは河内の国、伯田藩の剣道指南であり、自身も幼少より武術を好み、柔術を修行。鍼灸に出会う前には新海流柔術の達人、辻平四郎繁武氏のもとで活殺自在の法と接骨術を学んだとされている。

※1 『鍼灸真髓』 P 9

京都の武徳殿に入って修行することになるのであるが、その頃、心胆を錬り腹力を養ふために毎夜蠟燭一本だけ静坐して、相当長い間これを続け、それで丹田の力が出来たといふことを話された。

※2 『鍼灸真髓』 付録 P 1 8

柔術とは、江戸時代より伝わる日本古来の武術で、柔道や柔道整復術、合気道もその影響を受けています。

柔術では、修行者の段階に応じて技法を伝えていくのですが、活法や殺法は当然、最終段階でしか学ぶことは許されず、ほとんどが秘伝とされていたようです。

つまり、それを伝授した柔術家も伝授された澤田健も、柔術を習っていたという話ではなく、相当な修行を重ね、達人レベルだったと考えられます。

新海流は、江戸時代に樋口南海が起こした柔術の流派で、四代目継承者に辻井文七茂武の名前が見られます。名前に若干の違いがありますが、京都付近に伝承があったとされ、澤田健も京都の武徳殿にて修業したとのことから、おそらく澤田健はこの人物に柔術の指導を受けたものと考えています。

残念ながら、四代目について詳しいことは定かでないのですが、三代目長谷川種輔正勝が記した秘伝書(図1:1-4)なるものが残っています。

その内容は、技の名前と、急所が図示されていて、急所の中には、鍼灸の経穴名でも使われる日月と人中もありました。

同じものを澤田健が手にしていたかは定かではありませんが、そうかけ離れていない内容を、鍼灸の世界に入る前に、学んでいたと考えて差し支えないと思います。

そしてもう一つ大切なことは、修行のために丹田の力を養っていたということです。

師はもと古方の柔術家で武徳会に所属していた。…中略、師の学んだ新海流の急所が実はすべて五臓の募穴に一致していた。そして事後の救急法の操作点が亦五臓の俞穴（背腰部）に一致していた。…中略。そして最後にあらゆる活法の無効な場合には臍下一寸半の氣海が総活法として意味をなした。このことは単なる法則としてではなく、日常の猛稽古に度々失神、悶絶する数々の門下生を蘇生させる実用手段であった。以下略。

※3 『鍼灸澤田流』 P 6

これは、澤田健の内弟子をしていた山田国弼氏の著作からの引用であり、これによって澤田健が柔術修行時代に、すでに、俞穴を通じて内臓への影響を与えうることを修得していたことがわかりました。

しかし、この時点での急所や救急法の部位（経穴）は、あくまで作用点として身体に点在し、急所は、脱臼、骨折、麻痺、気絶などを起こすポイント、操作点は、急所による症状を回復させるポイントとして捉えていたと思われます。

それまで点在していたものが、実はすべて相互に関係していることに気づくのは、その後、朝鮮半島に渡ってからになります。

2. 柔術の急所と鍼灸の経穴が重なる

先生が朝鮮において接骨をやっていた頃たまたま或る患者が足をいためたのが原因で腰が痛くなり、腰が痛くなったのが原因で腹の具合をそこねた。先生が仔細にしらべて見ると腰のあたりにコリが出ている。そのコリを指尖で按みほぐしてやると、お腹の具合がよくなると共に、足の痛みも早くとれた。…中略。ある身体箇所損傷や打撲が原因で、腰や背中部分にコリが出来、それが内臓にまで影響する。

※4 『鍼灸真髓』 付録 P 20

この経験によって、人の身体に点在する作用点が、相互作用を持っていることに興味を持ち、古書屋を探して手に入れたのが、運命の書、『十四経發揮』です。

自分が臨床で感じ取った、コリとして表れた反応点や治療点が、症状のある部位と経絡と呼ばれる線でつながっているのが図示されていたのですから、それは驚いたと思います。

しかし、その驚きはまだ表層にすぎないことを、難解な漢文を読み進めていく内に気づくことになるのです。

3. 『十四経發揮』には中心がある

澤田健の『十四経發揮』に対する思いがはっきりと表れている言葉があります。

実に十四経は太極療法を説いた立派な経典で、第一の医学が示されてあるのです。

※5 『鍼灸真髓』 P 9 5

『十四経發揮』は経絡・経穴の書で、治療については書かかれていない、それがどうして太極療法を説いているのでしょうか。

著者、滑伯仁は『素問・靈枢』『難経』『甲乙経』『鍼灸資生経』『金蘭循経』などを読み込み、自身の臨床経験も踏まえながら、経穴の並びだけではなく、臓腑やほかの経絡との交会について、その流注を詳細に図と文字で表しています。

鍼灸学校を卒業した鍼灸師からすれば、当たり前のことばかりですが、澤田健は学術ではなく、経穴反応を感じる経験から入った人です。

さらに柔術家として修得した、急所や救急法の操作点までもが、すべてその系統だった線のなかに集約されていったわけですから、その感動は私たちには計り知れません。

そして、太極療法の原点となったのではないかと考えているポイントがあります。

それは滑伯仁が、本来は奇経である任督二脈を、十二正经と合わせた点です。

腹背の中心を走行し、諸穴の系（かか）るところであるからだ、その重要性を指摘しています。

任脈・督脈の表裏の中心線があることで、経絡をより系統だったものとして理解できたわけですが、澤田健にとってより重要だったのは、その根っこの部分です。

『十四経發揮』中巻、任脈のところに以下の文が見えます。

任與督一源而二岐…中略

可以分可以合者也…中略

分之於以見陰陽之不離、合之於以見渾淪之無間、一而二二而一者也

任脈と督脈は一源にして二岐である……。

時に応じて分け、時に応じて合するものである……。

これを分けると陰陽が離れないことがわかり、これを合わせる時はまるごと一つのものに間がないことがわかる。一にして二、二にして一のものである。

※筆者訳

ここで言う一源を、経絡の起始が同じと解釈できます。

起始については統一されていませんが、会陰、胞中ということになっています。

これは、陰部や子宮という解剖学的部位だけを指しているわけではありません。
柔術家である澤田健ならば、その指すもう一つの意味が、下焦、すなわち丹田の一気に
悟ったはずで
生命力の中心である丹田から、生命力の陽的な表れとして督脈があり、生命力の陰的な表れ
として任脈があり、それぞれ前と後ろから見ているに過ぎないということ。
さらに、その陰脈・陽脈の海として十二経脈と相互に作用している。
だからこそ、身体に表れるいかなる経絡経穴反応も丹田の生命力とつながり、その表裏、縦
横と影響し合っている。

自身が修行してきた柔術では丹田を中心に身体を鍛え、第二の人生として学び始めようと
した鍼灸の世界でも、丹田を中心とした身体観がすでに出来上がっていることを知ったの
です。

以後、少なくとも十数年の歳月を『十四経發揮』を手に、生きた身体に温石を当てながら、
経絡、経穴の研究に没頭していきました。

ただ単に、経穴や流注を覚えるには、あまりに長い時間です。

その時間の多くは、一つの経穴がどのように他の経穴や経絡、または臓腑と関係しているか、
そしてその刺激が生命力にどのように影響しているのかを丹田を通じて探る、ということ
に注がれたのでしょ

4. 『難経鉄鑑』六十六難の図

『十四経發揮』を研究し、朝鮮半島から帰国した後、大きな影響を受けた書物がもう一冊あ
ります。

それは、江戸時代に広岡蘇仙が著した『難経鉄鑑』です。

伴尚志氏の『日本型東洋医学の原点』によると、『難経鉄鑑』とは、『難経』解説書の焼き直
しという位置づけではなく、当時の中国大陸にもなかった視点で、生きた人間の身体を丸ご
と診る、一団の原気を説いた書物であることが、系譜的に指摘されています。

東京の治療院で開業した澤田健は、十四経の反応に従った治療にて、目覚ましい効果を挙げ
ていましたが、実際のところ、難病などがなぜ治るのか、わからないけど勝手に治ってしま
う感覚だったようです。

臨床経験における疑問が、『難経鉄鑑』六十六難の図（図2）を見ることで解けたのは、丹
田を中心とした身体観に加え、そこに原気の別使として三焦の概念が示されていたからで
しょう。

丹田の一気に、臓腑、原穴を交通するものとして三焦があり、お灸がその調整をすることで
原気を補う。

これによって、自身の据えるお灸によって丹田が充実し、様々な病気や症状が治っていくこ
とに得心したのだと思います。

柔術、十四経で培った、丹田を中心とした身体観、そこに太極療法の萌芽があり、臨床によって成長し、『難経鉄鑑』によってそれが裏打ちされたのです。

生きた人間の身体をありのままに捉えようとし、人間の治ろうとする力を信じ続けた、広岡蘇仙と澤田健の意志は、時代を超えて共鳴し続けているように感じます。

結語

柔術と鍼灸術は、澤田健にとって、丹田という身体を中心によって地続きのものであった。後に確立する「太極療法」。

病名にはとらわれず、ただ丹田を充実させることを主眼としていた理由がより明瞭となった。

「病気がぐんぐん勝手になほっていく」「お灸はなほろうとする力を伸ばす」などの言葉を改めて読むと、病気ではなく、常に生命力に目が向いていたことがよくわかる。

図1-1

図1-2

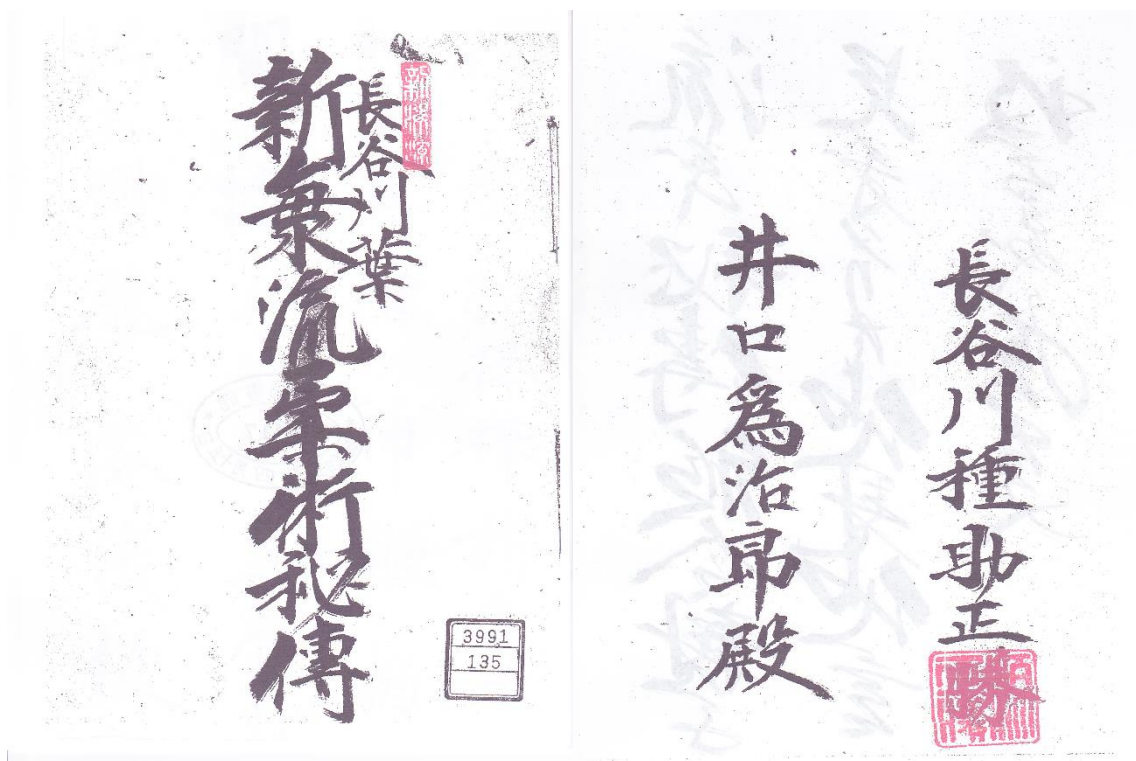


图 1-3

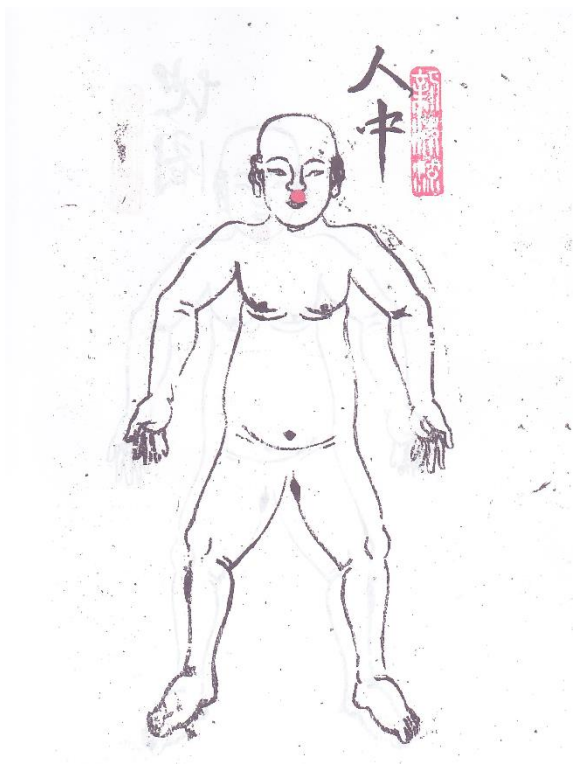


图 1-4

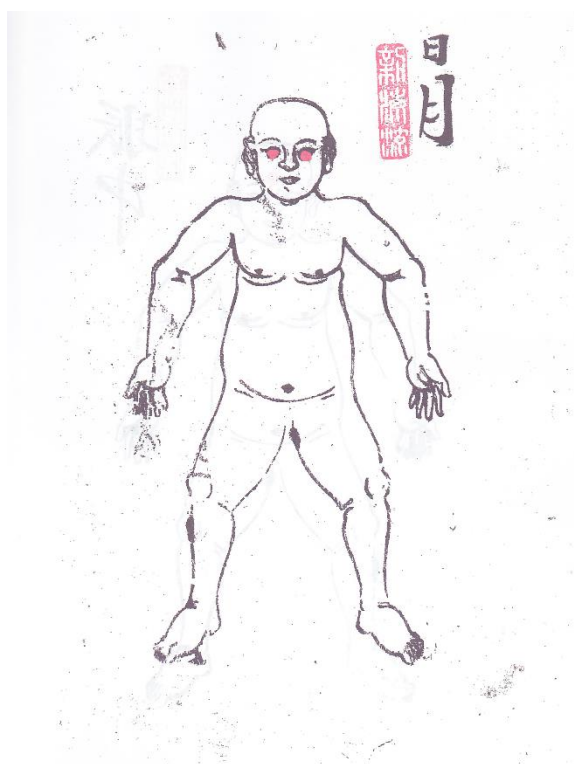
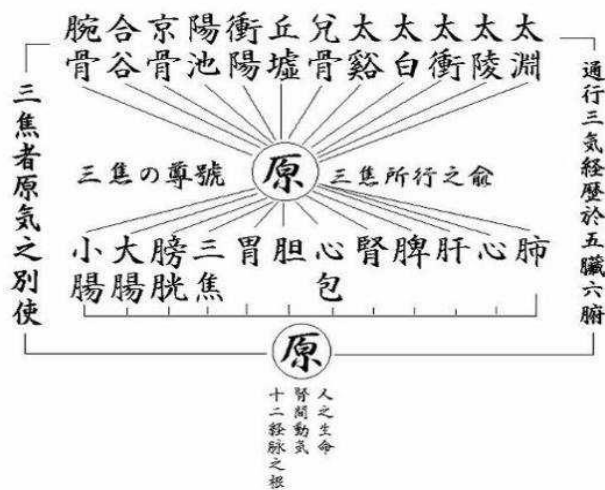


图 2

六十六難

十二原



每早對六十
六難圖。默
坐省察原氣
之流行榮衛
之往來。而
知身中之
大極。則自
貫穿萬象之
妙契。